

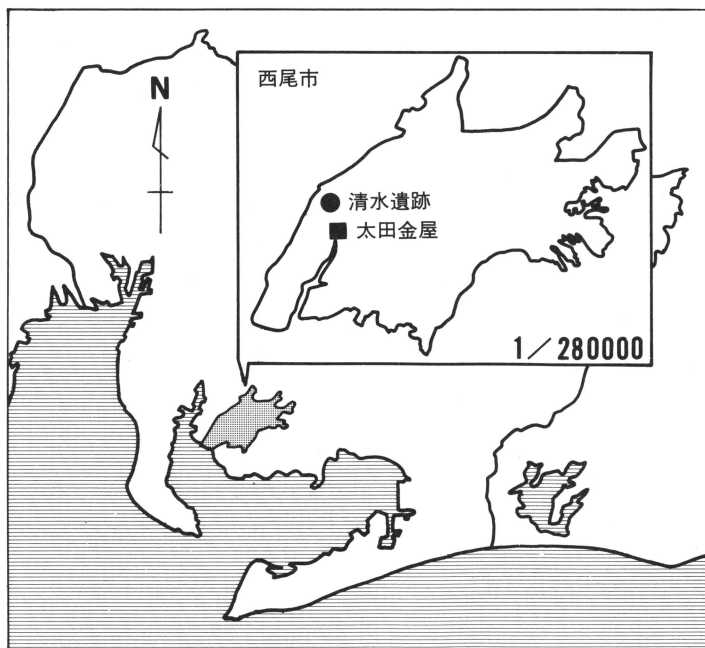
清水遺跡出土の鉄滓と三州平坂鋳物師

尾 野 善 裕

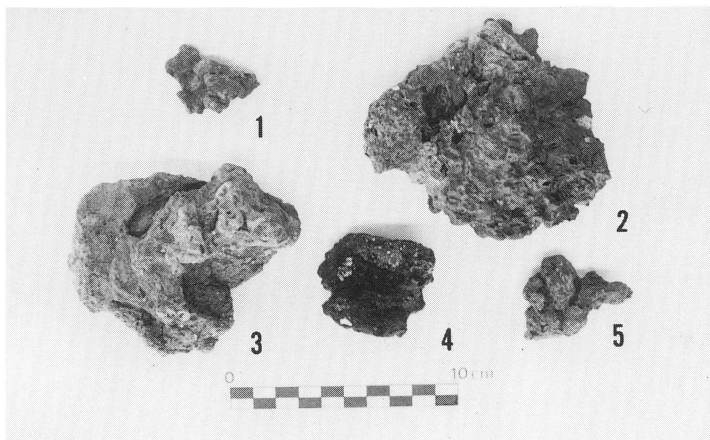
1

近世、三河国幡豆郡平坂村（現愛知県西尾市平坂町）には、近江国辻村から移住してきた鋳物師太田氏の工房・太田金屋が存在していた。（財）愛知県埋蔵文化財センターでは、平

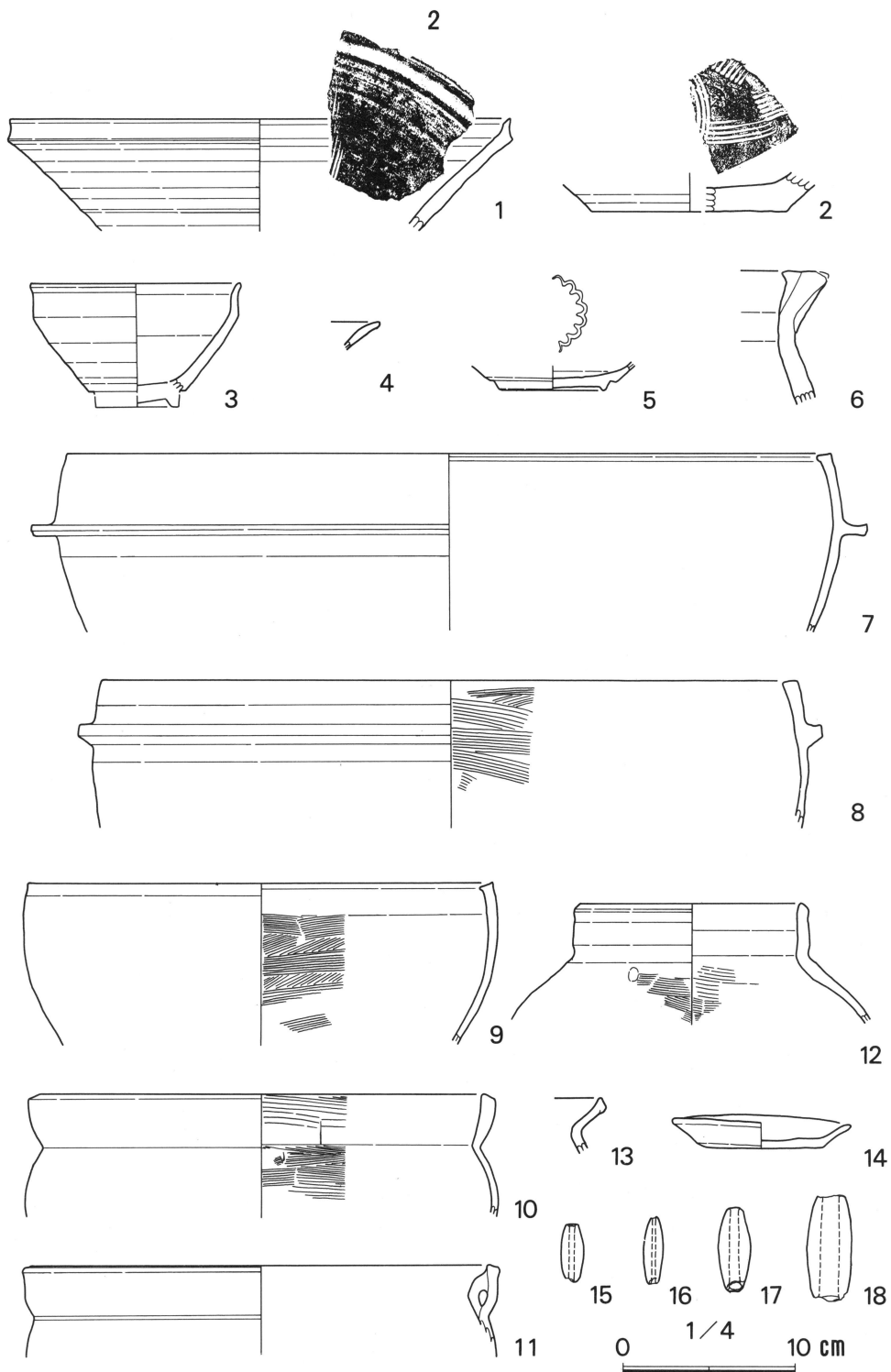
成元年度より平坂町に北接する西尾市中畑町地内に於いて清水遺跡の発掘調査を実施しているが、平成2年度の調査で近世の遺構から鉄滓5点の出土をみている。調査地点は太田金屋の故地から至近の位置にあり、明治以前は太田氏が当地の鋳造業を殆んど独占していたことから、これらの鉄滓が太田金屋の鋳物生産に関わる可能性は高いと思われる。これまで三河鋳物師の活動については、主として文献史学の方面で研究が蓄積されてきているが、⁽¹⁾ 本稿では考古学的アプローチの可能性を秘めた資料として、清水遺跡出土の鉄滓とその伴出遺物を紹介する。



第1図 清水遺跡・太田金屋略位置図



第2図 清水遺跡90A・B区出土鉄滓



第3図 90A区SK19下層出土遺物実測図

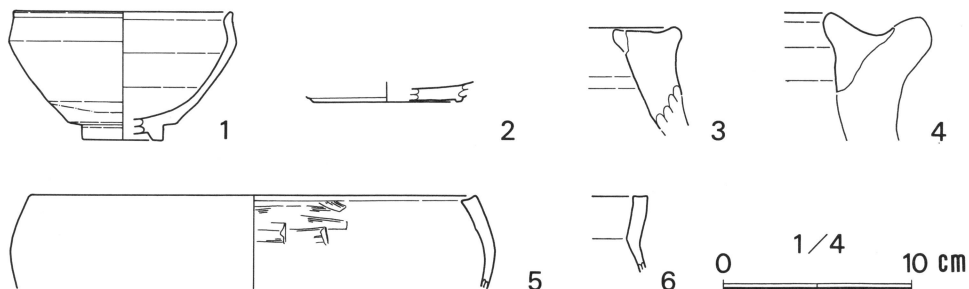
鉄滓は、90A区SK19・SD01から各1点、90B区SK36から3点出土している。但しこれは整理途上での確認点数であり、今後整理作業の進展に伴い増加することが予想される。

90A区SK19

径4.0m以上、深さ0.7mの不整形を呈する土坑。埋土はハマグリを主体とする貝層（上層）と、褐色土層（下層）の2層に大別できる、鉄滓（第2図1）はこのうち下層から出土している。重量15g。伴出遺物（第3図）には、瀬戸・美濃焼の播鉢（1・2）・天目茶碗（3）・稜皿（4）・志野丸皿（5）、常滑焼の甕（6）、土師質土器の羽釜（7・8）・鍋（9～13）・皿（14）、管状土錘（15～18）の他、図示していないが炉壁片とみられる焼土塊、拳大の被熱礫がある。これらは、1が16世紀前半⁽²⁾、6が同後半⁽³⁾に遡るとみられる一方で、2・3・5が17世紀中葉から後半の年代観を示すなど多時期の遺物が混在する様相を示している。

90A区SD01

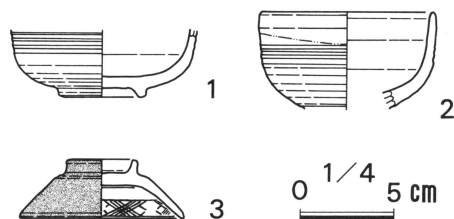
幅0.9m、深さ0.5mの溝。埋土は、ハマグリを主体とする混土貝層。鉄滓（第2図2）は重量310g。伴出遺物（第4図）には、瀬戸・美濃焼の天目茶碗（1）・志野丸皿（2）、常滑焼の甕（3・4）、土師質土器の鍋（5・6）、被熱礫多数がある。いずれも17世紀前半～後半の範囲内に位置づけ得ると思われる。



第4図 90A区SD01出土遺物実測図

90A区SK36

遺構が調査区域外に迄広がるため、平面形の全体像を窺い得ないが、長軸13m以上、深さ1.8mの計測値を得た。土坑とするよりも溝と呼ぶべきかもしれない。出土の鉄滓（第2図3～5）の重量は35～295g。伴出遺物は、瀬戸・美濃焼、常滑焼、土師質土器を始めと



第5図 90B区SK36出土遺物実測図

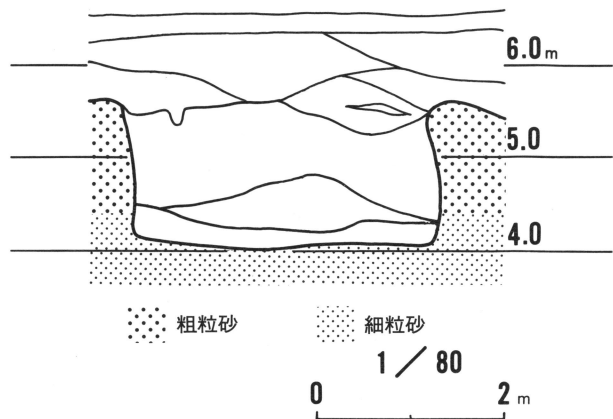
して、伊万里、瓦、煙管、鉄釘、被熱礫、焼土塊など種類、量とも豊富である。遺構の年代観については、出土遺物の全容を把握するに至っていないため断定を避けたいが、第5図に示す瀬戸・美濃焼の腰鍔茶碗（1・2）、外面に青磁釉が施された伊万里の蓋（3）の存在から、18世紀後半、乃至それ以降と考えられる。

3

以上、鉄滓出土の遺構について概観してきたが、いずれも多時期に亘る遺物の出土があり、複雑な様相を示している。しかし、当該遺構出土のうち、最も新しい遺物の年代観によって遺構の時期を決定するという考古学の基本に添って考えるならば、90A区S K 19下層・S D 01の年代を17世紀後半に、90B区S K 36の年代を18世紀後半以降に求めることは許されよう。但しこの年代観は、あくまでも遺構のものであって、鉄滓自体の時期を必らずしも示しているとは限らない。しかし、寛文11（1671）年に近江国より移住し、明治初期まで生産活動を継続したという太田金屋の存続期間と一致していることは、両者の関係について極めて示唆的である。また第3図6など、鉄滓に伴って出土している常滑焼の甕には、焼成後の強い2次被熱のために器表面の剝離を生じているものが少なくなく、多数の被熱礫・焼土塊の存在と共に、遺跡近傍で何らかの高熱を発する作業が行われていたことを推測させる。さらに、平成元年度、及び2年度の調査で深さ1.5～2 mを越える大型土坑数基を検出しているが、遺跡の基盤層が地表面より1 m以下では砂層となることからみて、これらについても鋳物砂の

採掘を目的としたものであった可能性を指摘できる（第6図）。

このように、清水遺跡については単に鉄滓が出土したというにとどまらず、遺跡自体が鋳造業と何らかの関わりを有していたことが推測されるのであるが、鉄滓を除いていずれも状況証拠に過ぎず、鋳型・鋳造製品の出土をみていない現状では、清水



第6図 大型土坑（90A区S K 17）断面図

遺跡を鋳物師の生産活動関連遺跡と断定するには、未だ証拠不十分と言わざるを得ない。しかし、生型の鋳型は、製品の鋳造完了後破碎して再度利用できることや、古鉄は鋳潰して新しい製品の原材料とされたであろうことを考慮すれば、これらの遺物の不在はむしろ

当然とすべきであるかもしれず、清水遺跡と太田金屋の関係を積極的に否定する根拠とはなり得ないとする。

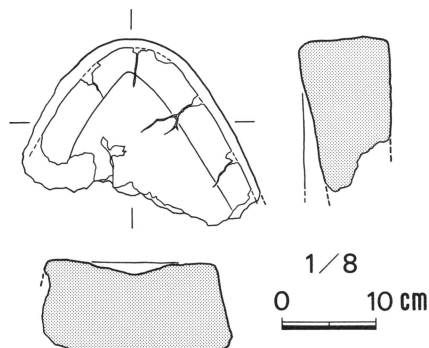
4

小稿では、清水遺跡出土の鉄滓について太田金屋との関連を想定したが、資料的制約から十分に論を展開し得なかった。しかし、平成2年度調査分についての遺物整理は、小稿で取り上げた遺構の出土分を除いて、殆ど未着手であるため、今後これらの整理作業を通して、清水遺跡の性格解明に努めたいと考えている。尚、小文を記すにあたり、西尾市教育委員会・松井直樹氏、平坂鑄工(株)・伊藤彰郎氏を始めとして、加藤安信・大橋正明・北村和宏の各氏から多くの教示を賜った。記して感謝する。

〔註〕

- 1) 平坂鑄物師については、杉田公弘「平坂の鑄物業」『西尾市史』三 1976 に詳しい。
- 2) 瀬戸・美濃焼の年代観については、藤澤良祐「瀬戸大窯発掘調査報告」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』V 1986、同「本業焼の研究(1)~(3)」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』VI~VIII 1987~1989に依った。
- 3) 常滑焼の年代観については、中野晴久「近世常滑焼における甕の編年の研究ノート」『常滑市民俗資料館研究紀要』II 1986に依った。

付記 本稿脱稿後、整理作業の過程で90B区SK36出土遺物中に犁先の鑄型片(第7図)のあることが判明した。清水遺跡出土鉄滓と太田金屋を結びつける資料として注目される。



第7図 90B区SK36出土犁先鑄型実測図